

## 『玄與日記』が記す「かみの關」地点の比定(1596 年豊後地震)

四国電力株式会社\* 松崎 伸一

大分県立芸術緑丘高等学校† 平井 義人

### Location Identification of "Kaminoseki" in the 1596 Bungo Earthquake

Shinichi MATSUSAKI

Shikoku Electric Power Co., Inc., 2-5 Marunouchi, Takamatsu, Kagawa, 760-8573 Japan

Yoshito HIRAI

Geijutsu Midorigaoka High School, 1-11 Uenogaoka-higashi, Oita, Oita, 870-0833 Japan

The "Genyo Nikki" was the diary written in 1596 by Kokusai Genyo. When he visited Saganoseki in Oita city, Japan, he described that tsunami attacked a place called "Kaminoseki". This event is supposed to be the 1596 Bungo earthquake tsunami. Previous studies regarded location of "Kaminoseki" as Isshakuya-Uwaura in east part of Oita city or as Suou-Kaminoseki in Yamaguchi prefecture. We surveyed historical documents in Bungo, and found that Saganoseki-Uwaura was described as "Kaminoseki" just after 1596. Then we conclude that "Kaminoseki" described in the "Genyo Nikki" would be Saganoseki-Uwaura.

Keywords: 1596 Bungo Earthquake, Tsunami, Genyo Nikki, Kaminoseki

#### § 1. はじめに

1596 年(文禄五年)豊後地震は、所謂「瓜生島沈没伝説」で知られる地震であり、宇佐美・他(2013)によれば、地震規模は  $M7.0 \pm 1/4$  で、「高崎山その他崩れ、八幡村柞原八幡社拜殿その他倒潰。次いで海上に大音響を發し、海水が遠く引き去り、海底が現れた。のち大津波がきて別府湾沿岸は被害を受けた。沖ノ浜に高さ 4 m の波が襲い、すべてのものを流し去る。」、「佐賀関で崖崩れ、家屋倒れ、田畑塩田の流没 60 余町歩(約 60 ha)。」、「瓜生島が 80% 陥没し、死 708 人という。」とされている。発生日は文禄五年閏七月九日(1596 年 9 月 1 日)説と、閏七月十二日(9 月 4 日)説の二説ある。

その際の豊後国佐賀関における津波被害を記した同時代史料に『1596 年ルイス・フロイスの年報補遺』がある。ただこれには、佐賀関の一部が冠水したと記述されている程度であり(4.7 で詳述)、同地で津波被害があったことは確かと考えられるものの具体的な被害の記述はない。

具体的な津波被害を書き留めた同時代史料としては『玄與日記』がある。これは、薩摩から帰洛する公家・近衛信尹のぶたかに随行した阿蘇惟賢これかた(阿蘇大宮司惟前これきま)

の子。出家して黒齋玄與と号す。生没年不詳)が記した史料である。信尹は文禄三年(1594 年)に勅勘を被り薩摩配流となったが、同五年に勅勘が解け、帰洛する折に玄與が随行し、その道中の出来事などを書き残したものが『玄與日記』である。その中で玄與は、佐賀関に立ち寄った際の記述として、「さかの關迄御着被成候。去七月十二日之地震之時。かみの關と申浦里は。大波にひかれて家かまともなし。いのちを失なふもの數をしらす。哀なる事ともなり。」と書き残している。

この「かみの關」地点について松岡・他(2010)は、周防国上関(現在の山口県熊毛郡上関町、図 1)と解釈し、「この記事によって、豊後地震津波が広域に渡る被害を及ぼす災害であったことが明らかとなる」と述べている。一方、羽鳥(1985)は、「かみの關」を旧一尺屋村(現大分市)上浦(以下、一尺屋上浦と記す。図 1)と判断している。また松崎・他(2012)は、佐賀関の別府湾側にある上浦(以下、佐賀関上浦と記す。図 1、図 2)を上関と記述した史料を示し、「かみの關」を佐賀関上浦と論じた(2.7 で詳述)。

このように、『玄與日記』の「かみの關」地点がどこを指すかについては見解の相違がある。そこで筆者ら

\* 〒760-8573 香川県高松市丸の内 2-5

電子メール: matsuzaki12987@yonden.co.jp

† 〒870-0833 大分県大分市上野丘東 1-11

は、史料を収集し考察を行った。

## § 2. 既往の解釈

まずは「かみの關」の位置に関して言及した歴史記述や研究例を紹介し、「かみの關」地点が如何に解釈されているかを整理する。

### 2.1 『雉城雑誌』(1830-1844)

『雉城雑誌』は、府内城主の略伝を始めとし、神社・仏閣・名所旧跡等の由緒を記述したもので、もと『豊府聞書』等からその材料を得て、天保年間(1830-1844年)に編集されたと考えられている。『豊府聞書』は豊後地震津波について、「洋溢于府内及近辺之邑里 大波至三度」と記しているが、「かみの關」という記載や佐賀関の津波被害に関する記述はない。一方、『雉城雑誌』は八の瓜生島址の項に、「去ル七月十二日ノ地震ノ時、カミノ關ト申ス浦里ハ、大浪ニヒカレテ家竈モナシ。命ヲ失フモノ數ヲ知ラズ。哀成事共ナリ。中略。同七日、伊與ノ海へ渡リ、又云々。是即チ、此地震水災ノ事ヲ記サレシ也。按ニ、此水災ハ、閏七月十二日ナルヲ、此書ニハ七月十二日トアリ。蓋シ閏ノ字ヲ脱スルカ、右ノ上ノ關ト云ハ、今ノ上ノ浦ト云地也。」と記述している。「去ル七月十二日ノ地震ノ時」から「伊與ノ海へ渡リ」までは『玄與日記』(4.6で詳述)からの引用であり、「是即チ」以降で独自の解釈を加え、「かみの關」を当時(天保期)の「上ノ浦」とであると判断している。ただし、これが現在の何処にあたるかは本書だけでは特定できない。

### 2.2 羽鳥(1985)

別府湾沿岸における豊後地震の津波高について調査・整理した文献であり、『玄與日記』を引用し、「かみの關」を一尺屋上浦と解釈している。しかし一尺屋上浦と解釈した理由については詳述されていない。

### 2.3 白井(1990)

白井(1990)は、「黒齋玄與の旅—『玄與日記』—」というタイトルで、『玄與日記』の前半部の旅行の記録を中心に考察し、「かみの關」は、山口県熊毛郡上関町か。信尹西下の際、八島(山口県熊毛郡上関町八島)に立ち寄っているところから、同県熊毛半島南端および瀬戸内海西部に位置する長島・八島・祝島にあたる上関であろう。」と論じている。なお、『玄與日記』の後半部は、京都における貴人、文人との交流、畿内の名所旧跡を遊歴した記述である。

### 2.4 平凡社(1995)

平凡社(1995)は、『日本歴史地名体系 45 大分県の地名』という刊本の中で、関村(佐賀関町)の近世の歴史について、「近世」勅勘を被り薩摩に流される

こととなった関白近衛信尹は、文禄三年(1594)四月二四日に船で佐賀関に着き、暴風雨の静まるのを待って二七日に出航した。同五年許されて帰洛の途次、八月三日当地に着き八日早朝出船した(三貌院記)。帰洛の時は大地震直後で、「かみの關」(上浦)は津波によって家屋は流失し、死亡者は数知れずと記録されている(玄與日記)。と記述しており、「かみの關」を上浦と判断している。関村の項における記述であることから、上記上浦は佐賀関上浦を指すものと考ええる。

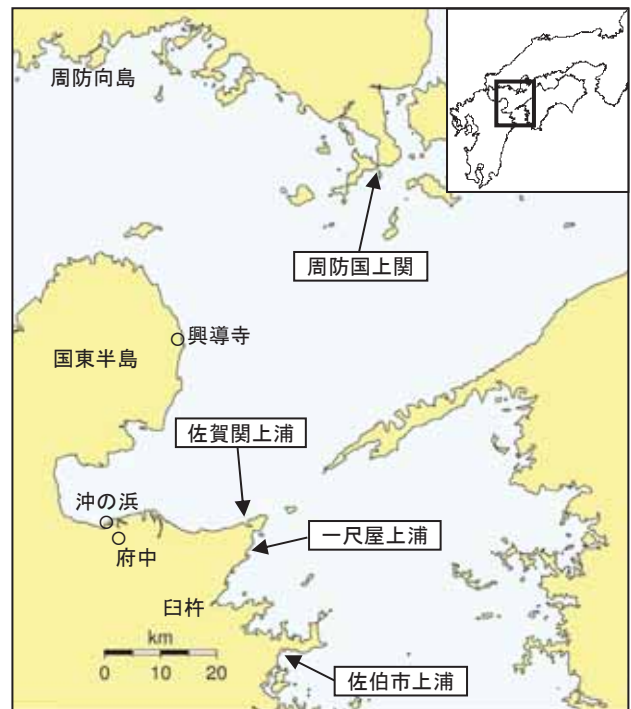


図1 「かみの關」の候補地点  
Fig. 1 Possible sites of "Kaminoseki"

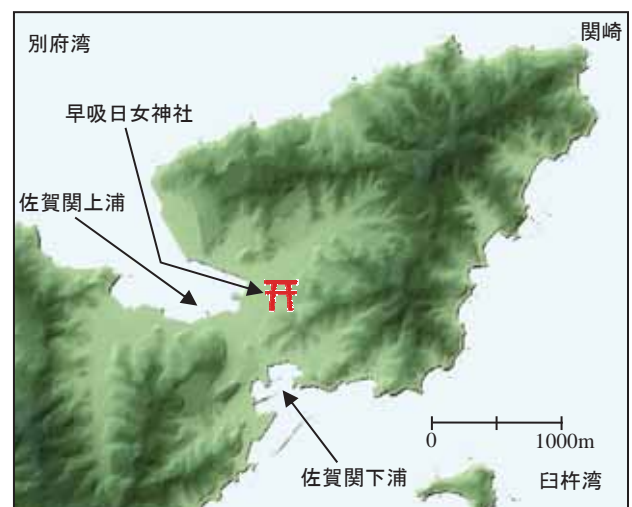


図2 佐賀関上浦と下浦の位置(現在の地形)  
Fig. 2 Location of Saganoseki Uwaura and Shitaura

## 2.5 前田(2006)

前田(2006)の『三藐院 近衛信尹 残された手紙から』という書は、近衛信尹の生涯をその手紙から読み解いたものである。前田(2006)は、「三日 佐賀関(豊後国海部郡)着。成田三十郎参着。玄与、「去七月十二日之地震之時、かみの関(山口県熊毛郡)と申浦里は、大波にひかれて家かまどもなし。いのちを失なふもの数しらず。哀なる事どもなり」と、地震や津波の被害の伝聞を記している。」と述べ、「かみの関」を山口県熊毛郡と判断している。ただし根拠については明記されていない。

## 2.6 松岡・他(2010)

松岡・他(2010)は、「この『玄与日記』中には、豊後地震津波による周防国上関の被害が記されている。」、「この記事が注目されるのは、同時代文献で、しかも別府湾岸以外の被害を記している点である。」、「この記事によって、豊後地震津波が広域に渡る被害を及ぼす災害であったことが明らかとなるのである。」と、「かみの関」を周防国上関と比定している。しかし、その根拠については記されていない。

## 2.7 松崎・他(2012)

松崎・他(2012)は、『豊後國古城蹟并海陸路程』(1649)における「下關湊舟懸り、西北風には六端帆より拾四、五端、帆の船百艘程懸り申候。東南風には波高く、懸り悪し。此湊南に向、深さ四尋。五尋之間。但冬泊り吉。春夏は潮懸り迄仕る。此浦より上關迄船路式里。但、陸路は式町式拾八間也。」という記述など、佐賀関上浦を上関と記述した史料を示し、「文献調査の結果より、「かみの関」は、佐賀関上浦の可能性が高いと考えられる。」とした。さらに津波シミュレーション解析に基づいて、周防国上関では、「当時の潮汐変化を考慮すると最大水面高さはT.P.+1.7 m程度となる。地盤高さを仮にT.P.+1 mとすると浸水高さは0.7 mであり、羽鳥(1985)が「家屋の流失した地点では、浸水面が地上から1.5~2 m」としているが、周防国上関では家屋を流出するような津波ではなかったと評価される。」と述べた。ただし、松崎・他(2012)が根拠として示した史料、『豊後國古城蹟并海陸路程』、『雉城雑誌』、『佐賀関史』[山田(1925)]は、豊後地震後に成立した史料である。

## 2.8 松岡・他(2012)

松岡・他(2012)は、「佐賀関を「かみの関」と呼ぶ史料として、松崎らは『雉城雑誌』を挙げている。」、「この史料では、『玄与日記』の記事を引用した上で「かみの関」は「上ノ浦」であるとしている。松崎らはこれを佐賀関上浦(別府湾側の集落)と考えたようである。確かに史料 3(『雉城雑誌』)を参考にし、佐賀関が「かみの関」であると考えてしまうかもしれないが、

史料 3 は天保年間に編纂されたものであり、地震後200年以上も経過していることになる。」と『雉城雑誌』の記述は信頼性に欠けると主張し、さらに、「この史料の他には、同時代史料以外でも佐賀関を「かみの関」と呼ぶものはないのである。以上から考えると、豊後地震当時「かみの関」と呼ばれていたのは佐賀関ではなく周防の上関だということになる。そして、『玄与日記』の津波被害記事は上関の被害を指しているという結論に達する。」と述べている。ただし、松崎・他(2012)が根拠のひとつとして示した『豊後國古城蹟并海陸路程』については、まったく触れていない。

しかし一方で松岡・他(2012)は、「(周防国)上関では本当にこのような(『玄与日記』にあるような)被害が出たのであろうか。このような疑問を投げかける史料がある。」とも述べ、『日本往還日記』を取り上げている。そして、「この記事では上関はまるで何の被害もなく無事だったかのように書かれており、『玄与日記』の被害記述とは全く異なるのだ。」と述べ、さらに「もし上関で『玄与日記』にあるような津波被害があったとするならば、約1ヶ月で地震以前(あるいはそれに近い位)の復興を成し遂げていたことになる。そのようなことが可能だったのかは分からないが、そうでないとするれば、上関の津波被害はそれほど大きいものではなかったことになる。」と述べている。(『日本往還日記』については5.3で詳述する)

## 2.9 平井(2013)

平井(2013)は、「佐賀関港を「上関」と呼称している決定的な証拠が臼杵市立臼杵図書館(臼杵市教育委員会)が所蔵する絵図の中に遺されていた。」と述べた上で、『寛永海部大分大野三郡図』(図3)の佐賀関上浦に「上関村」という記述がある事実を指摘し、「かみの関」は半島北側の佐賀関港を指すものと考えられる。」と論じている。平井(2013)のいう佐賀関港とは、佐賀関上浦側の港のことである。

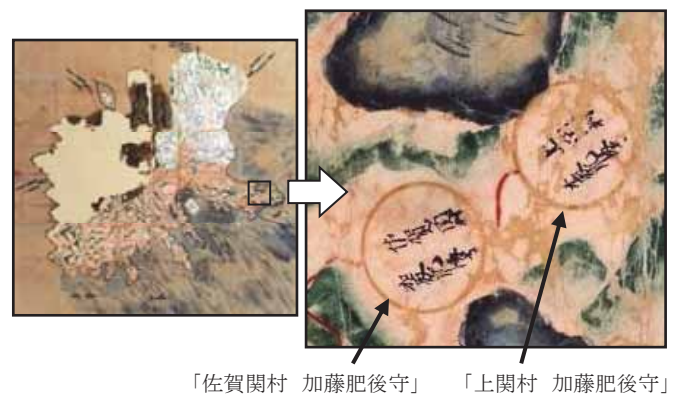


図3 『寛永海部大分大野三郡図』

Fig. 3 "Kan'ei province map of Amabe, Oita and Ohno"

表 1 既往の解釈

Table 1 Opinion of previous studies

解釈地点	既往の歴史記述や研究例
上ノ浦	『雉城雑誌』(1830-1844)
豊後国一尺屋上浦	羽鳥(1985)
豊後国佐賀関上浦	平凡社(1995), 松崎・他(2012), 平井(2013)
周防国上関	白井(1990), 前田(2006), 松岡・他(2010), 松岡・他(2012)

## 2.10 既往解釈のまとめ

以上に列挙した既往の解釈を整理すると表 1 のようになる。ただし、『雉城雑誌』には「上ノ浦」としか記述されておらず、豊後国の佐賀関なのか一尺屋なのか、あるいは他の地点を指すのかを特定することは難しい。別府湾周辺で「上ノ浦」に該当する可能性がある地点を探すと、佐賀関上浦、一尺屋上浦以外に佐伯市上浦(図 1)があげられる。しかし佐伯市上浦の名称は、佐伯藩が領地内の浦里を上浦村・中浦村・下浦村と区分したのに由来し、元禄郷帳(1701 年)で初めて確認される。それ以前の正保郷帳(1647 年)では戸穴村と記されており、上浦または上関に相当する地名は見受けられない。このため佐伯市上浦は候補から外れる。したがって、『雉城雑誌』の「上ノ浦」は、周防国上関、豊後国佐賀関上浦、同一尺屋上浦の何れかを指すものと考えられる。

このように既往の歴史記述や研究例においては、「かみの關」の候補地点として3地点(図1, 表1)の解釈がなされており、混乱が見られる。この原因は、①豊後地震における佐賀関の津波被害に関する同時代史料が少ないこと。確実なものは『1596 年ルイス・フロイスの年報補遺』のみである。②佐賀関上浦を上関(かみの關)と記した同時代史料がなかったこと。③周防国上関は中世初期から海上交通の要衝として著名であったこと、が背景にあり、同時代史料に基づいた十分な考察がなされないまま地点の比定がなされたことによると考える。そして、「かみの關」が豊後国なのかあるいは周防国なのかは、豊後地震の津波被害範囲及び震源像を大きく変えることにつながる問題であり、看過できない。

### § 3. 「かみの關」の候補地点

前述の3候補地点について、まずは簡単な予察を行うこととする。

#### 3.1 周防国上関

吉田(1993)によれば、古くは竈戸の関と称し、文安二年(1445 年)の史料(『兵庫北関入船納帳』)には関

門海峡の下関(赤間関)に対して「上関」として見える。中世には大内氏が海駅を、近世には毛利氏が本陣を置くなど、瀬戸内海航路の寄港地として賑わっており[吉田(1993)], 海上交通の要衝として広く知られていた。

#### 3.2 佐賀関上浦

北と南とに天然の良港を有する佐賀関は、『古事記』、『日本書紀』に曲浦として登場する。もと須賀と称したものが佐加に転じたという説があり、霊亀元年(715 年)には関司(関所)が置かれ、佐賀関の地名の起源となった[佐賀関町史編集委員会(1970)]。さらに、「この地に祭られ居る早吸日女神社を何時の頃よりか関権現と称し、俗には御関様と呼び習わしたので、その鎮座地たる佐賀関をも単に関と云い至った」[山田(1925)]という。この単に関という呼称に「みやこに向ふ方を上浦と云ひ、その反対を下浦といふ」[山田(1925)]という上・下の呼び方があわり、佐賀関に「上関」「下関」という地名が生まれたと考えられる。2.7 で触れた『豊後國古城蹟并海陸路程』には、佐賀関上浦を「上關」、佐賀関下浦を「下關」とする記載があることから、17 世紀前半の段階では佐賀関上浦に「上關」の存在を確認できる。ただし、現在、佐賀関には上関・下関という地名は残っていない。

#### 3.3 一尺屋上浦

前述の『豊後國古城蹟并海陸路程』は、一尺屋上浦のことを「壹尺屋東浦」、一尺屋下浦を「壹尺屋南浦」と記述している。上関と表記された事実は確認できない。

以上の予察により、一尺屋上浦については、上関と表記された事実を確認できないこと、津波の波源域と考えられる別府湾とは反対側に位置し、高い津波に襲われた可能性は佐賀関上浦よりも低いと考えられることから、一尺屋上浦を指す可能性は低いと考える。そして、予察から過去に上関と呼ばれた事実を確認できたのは、周防国上関と佐賀関上浦である。周防国上関については、豊後地震以前の史料で地名を確認できたが、佐賀関上浦については、3.2 で取り上げた史料は豊後地震後に成立したものであることから、佐賀関上浦についてさらに詳しく史料を調査し、整理することとする。

### § 4. 佐賀関上浦に関する史料

佐賀関上浦における「かみの關」の存在に関連する史料を年代順に整理する。史料の右のアラビア数字は、史料の成立年もしくは「かみの關」に関連する記述の年代である。

#### 4.1 『大友義統袖判条々掟書』(1588)

豊後の戦国大名、大友氏の第22代当主 大友義統(1558-1610)が天正十六年(1588年)六月廿八日に発給した11か条の掟書であり、佐賀関の政治、行政、訴訟、徴税等について言及している。ここでは、「關兩浦町立之事」と記されており、1588年に佐賀関に2つの港町を設立するよう、下達されたことが確認できる。鹿毛(2006)は、「言わば「佐賀関法度」としての性格を有する史料である。」と述べている。

#### 4.2 『寺澤廣政書状』(1588)

天正十六年(1588年)十月廿六日付『寺澤廣政書状』に、「豊後國より御材木登候者、如毎々木おもさ積糧米、算用次第可計渡候、上関より尼崎迄ハ百里之海上候、上関下へ之儀者、彼奉行衆墨付次第算用可仕候、何も百石目のおもさに付、十里ニ六斗宛可相渡候、能々念を入可申候、恐々謹言」とある。これは豊臣秀吉が京都に大仏殿を建設するに際し、秀吉の命を受けた寺澤廣政(1525-1596)が豊後から尼崎へ材木を送る際の船賃を通達した書状である。

この史料だけからは、ここに記された「上関」地点の特定は難しいが、当時の瀬戸内航路(都と博多・朝鮮を結ぶ幹線ルート)に鑑みると、交通の要衝を占めた周防国上関の可能性が考えられる。しかし一方では、佐賀関上浦を指す可能性もあると筆者らは考える。天正十六年(1588年)に豊臣秀吉の海賊停止令が発出されて以降、瀬戸内海の安全かつ自由な通航が保障され、豊後、日向、大隅、薩摩と都とを結ぶ支線ルートとして、佐賀関から伊予国北岸沿いを経る航路も存在するようになったからである。実際、『玄與日記』もこの経路(佐賀関→青島→興居島→鞆の浦)をとっているし(図4)、4.5に記載する『南航日記残簡』(1596)でも、興居島→青島→三机→佐賀関→米水津という経路がとられている。さらには、享保の飢饉の際、幕府の救助米が豊後に送られたが、「この救助米を佐賀関の港で受け取り、海上船で(豊後の)各藩に持ちかえった」[佐賀関町史編集委員会(1970)]という事実は、佐賀関が豊後国において都との流通の拠点のひとつであったことを示している。以上から、この史料が記す上関は、支線ルートの拠点になりつつあった佐賀関上浦の可能性も考えられる。

#### 4.3 『天正十六年参宮帳』(1590)

伊勢神宮参拝を仲介する御師の記録である。天正十八年(1590年)八月十一日の記載に、「さかのせきしゆ三人 したせきの喜右衛門殿 宮大郎殿 宮松殿」とある。この「したせき」は下関を意味するものと考えられ、下関という地名が佐賀関に存在したことが立証される。

#### 4.4 『三藐院記』(1594, 1596)

安土桃山時代から江戸初期の公家・近衛信尹(1565-1614)の日記である。信尹は朝鮮出兵に同行しようとしたが秀吉の怒りを買って、薩摩の坊津に3年間配流となる。その間の出来事を『三藐院記』に詳述した。1594年の薩摩配流時には佐賀関に立ち寄り、「さかの關下へ着」との記述を残している。この「下」は都に対して近い遠いを意味する上・下の「下」に該当するものとも考えることもでき、下関という地名が当時佐賀関に存在していた可能性が考えられる。

文禄五年(1596年)の帰洛時にも八月三日(9月24日)の早朝に佐賀関に寄港。上陸して宿に泊り、八日に出港している。

#### 4.5 『南航日記残簡』(1596)

儒学者・藤原惺窩(1561-1619)が、文禄五年(1596年)六月に京都をたち、閏七月に薩摩山川に至るまでの約70日間を綴った日記の残簡である。七月七日(7月31日)の項に、「而已刻泊豊後嵯峨關。海崖蜚舎五六十許。午時僦漁戸行浴。削瓜。斟酒。頗消暑。」とある。上浦か下浦かはわからないが、佐賀関には海際に漁家が50~60軒あったことが記述されている。

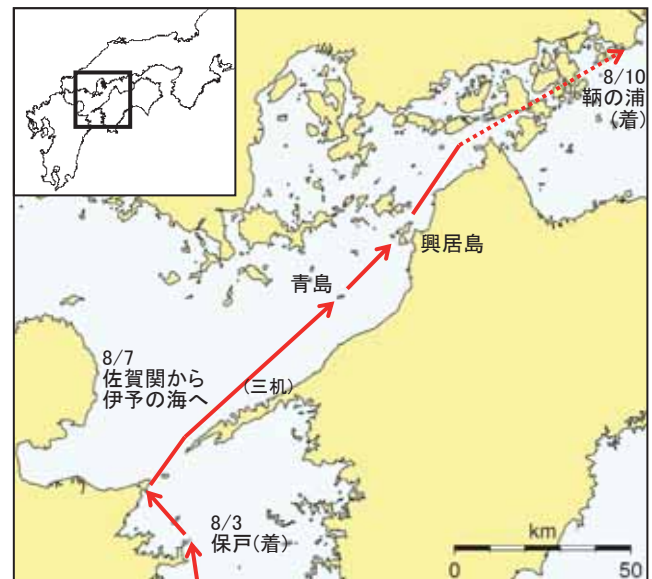


図4 『玄與日記』の旅路  
Fig. 4 Tour route of "Genyo Nikki"

#### 4.6 『玄與日記』(1596)

玄與は、豊後地震の約1か月後の文禄五年八月三日(1596年9月24日)に「ほと(保戸)という所へ着給ふ」た後、佐賀関に入り、同七日に佐賀関を立った(図4。『三藐院記』では三日に佐賀関に着き、八日早朝出立とされている。)。佐賀関に滞留した際の記述に、「それよりさかの關迄御着被成候。去七月十二日之地震之時。かみの關と申浦里は。大波にひかれ

て家かまともなし。いのちを失なふもの數をしらす。哀なる事ともなり。彼須磨の巻に。高鹽におちて。むすめをは岡部の里へやり侍ると見えしも。ことはおもひしられ侍りぬ。同七日にいよの海へ渡りぬ。」とある。

前半部は、「かみの關」の津波被害について触れたものであり、多数の死者が出たことを記している。後半部は『源氏物語』を引用したものである。『源氏物語』(須磨の巻)には「高潮といふものになむ、とりあへず人そこなはるるとは聞けど、いと、かかることは、まだ知らず」と、高潮は何をとる余裕もなく人の命が失われる云々の記述がある。そして明石の巻には、「高潮に怖ぢて、このころ娘などは岡辺の宿に移して住ませければ、この浜の館に心やすくおはします。」とあり、玄輿はこれを引用したものである。

#### 4.7 『1596年ルイス・フロイスの年報補遺』

ルイス・フロイス(1532-1597)はポルトガル出身のイエズス会宣教師で、秀吉の伴天連追放令(1587年)以後も日本国内に留まり隠密裏に布教活動を行った。また、文才があり日本語に堪能であったので、布教の傍ら日本におけるイエズス会の活動記録をまとめローマやゴア在住の上長に報告した[例えば、「瓜生島」調査会(1977)]. §1. で触れた佐賀関冠水の記録は、「豊後(の地震と津波)について」という報告の中で、「沖の浜近くで、同様な海難に遭遇した他の四カ所、すなわちハマオキ(Fama oqi), エクロ(Ecuro, \*Cucus?), 日出(Fingo, \*Fuigi), カシカナロ(Cascicanaro, \*Caxeranari), それに佐賀関の一部が、人々の言うところでは冠水したとのことである。」と記されているものである。ハマオキは浜脇、エクロは津留、カシカナロは頭成と解釈される。

海難報告は聞き伝えのものであるが、この報告はローマのイエズス会総長宛ての公式なものであり、史料としての信頼度は高いものと思われる。

#### 4.8 『朝鮮日々記』(1597)

『朝鮮日々記』は、臼杵安養寺の住職慶念(1536-1611)が臼杵城主太田<sup>かずよし</sup>一吉に仕える医僧として、秀吉の朝鮮出兵(慶長の役)に従軍した際の歌日記である。日記は慶長二年(1597年)六月から翌年二月に渡って綴られたもので、苛烈・凄惨な戦争のさま、厭戦気分、望郷の念などがつづられている。その慶長二年六月の記述に「上せき」の記述がある。以下にその記述を引用する。

「六月廿四日に御出船にて、さかのせきに御船付、其暮に橋本傳十郎に御振舞なされ候て、とかく候へハ土佐殿御船付、やかて御参会有りしなりけるを、とりあへず、

うすき来て関のとまりの夕暮に  
はや土佐とのと参会をめす

さるほどに子にて候八郎ハ、おくり船にのりおくれ、さかのせきまでハ来らすなり。さても、今すこし今生にての暇取申候ハん物をと、忍のひの涙せきあへすなけき侍りに、ふしきに夜半の時分に來り、おもひのままにいとまこひをし侍りしなれハ、いまハ心やすくおもひ、やかて其あかつきに、上せきより船にのらんとて、道すから手に手をとりあひて船本までたかひにうちつれ出しときに、あまりの名残おしさのままに、かやうに詠して、船にのりて出行けり。

二たひと帰らん事もまたかたし

いまをわかれの老か身そうき

さてもせき崎を過て、うら辺地にかかりし時に、あとを見おくりけれハ、臼杵のかたハとをくして霞かかり、あまりのおもひに、

残しおく其たらちねの妻や子の

なけきを思ふかせそ身しにしむ

これは朝鮮に向かう船が佐賀関から出港する際の記述である。慶念が乗船した船が「さかのせき」につき、夕刻からは長宗我部元親も参加しての宴席が催され、遅れて到着した息子八郎と名残を惜しんだ後、翌朝、朝鮮に向かう船(大船)に「上せき」で乗船し、出港した旨が記されている。したがって、「さかのせき」と「上せき」は極めて近い場所にあると考えられる。よってこの史料は、佐賀関に上関が存在した可能性を示すと考える。しかも史料の成立年が1597年と豊後地震の翌年である。

#### 4.9 『寛永海部大分大野三郡図』(1615-1626)

臼杵市教育委員会が所蔵する近世絵図資料群のひとつである。豊後国八郡中、臼杵藩の領地がある海部・大分・大野の三郡を描画している(図3)。村形に丸輪型を採用するなど、慶長国絵図の様式を踏襲しており、臼杵藩が作成した国絵図関連の史料ではないかと考えられている。臼杵市教育委員会(2005)は図に描画された内容の年代を藩主名から元和元年~寛永三年(1615-1626年)と推定している。

この絵図には、佐賀関上浦に「上関村」、臼杵湾側の佐賀関下浦に「佐賀関村」という記述を確認でき、これより豊後地震の20~30年後に佐賀関上浦に「上関村」が存在したことが立証される。さらには、国絵図関連史料に上関村と記載されるということは、ある程度以前から上関という地名が用いられていたと考えられ、豊後地震時に上関が存在した可能性を示唆するものである。

なお、本史料以降、『天保国絵図』(1835-1838)など、多くの地図(絵図)で佐賀関に上関・下関の表記を確認できる。

#### 4.10 史料のまとめ

以上の史料より、豊後地震発生前の1590年頃の

佐賀関に「下関」を確認できる(『参宮帳』)。したがって、「下関」という地名が豊後地震当時に存在したことは確かと考えられる。一方「上関」については、『寺澤廣政書状』(1588)により、豊後地震発生前に存在した可能性も考えられる。そして、『朝鮮日々記』は、豊後地震の翌年の1597年に、佐賀関に「上せき」が存在した可能性を示す史料である。さらに、17世紀前半の国絵図関連史料(『三郡図』)に「上関村」として明記されていることから、「上関」は公的な集落名であることが立証される。よって「上関」についても、これらの史料から、豊後地震当時の佐賀関に地名が存在した可能性が考えられる。

## §5. 考察

前節では、豊後地震発生前の佐賀関に「下関」という地名が存在したことを確認し、また地震発生当時の佐賀関上浦に「上関」という地名が存在していた可能性があることを指摘した。そして筆者らは、『玄與日記』の「かみの關」は、この上関(佐賀関上浦)を指す可能性が高いと考える。一方では周防国上関のことを指すという指摘もある[例えば松岡・他(2012)]。しかし、「かみの關」が周防国上関であると考えた場合には、いくつかの疑問が生じる。以下では、その疑問点について考察する。

### 5.1 疑問点①:「かみの關と申浦里」

「かみの關」を周防国上関と考えた場合の疑問点の1つ目は、『玄與日記』における「かみの關と申浦里」という記述である。「かみの關」を単なる「浦里」(海辺の村里)としている。周防国上関は、中世には大内氏が海駅を置くなど、瀬戸内海航路の寄港地として賑わっており、その繁栄の状況に鑑みると「浦里」と表現されるような町ではないと考える。さらに玄與は、海上交通上重要な寄港地については、「備後鞆の浦へ着給ふ」、「細嶋へ七時に着侍りぬ」、「しふしに御着」と記し、これらと比するとそれほど著名ではない寄港地については、「豊後國の内かまへと申浦(大分県佐伯市蒲江)」、「大嶋と申浦(『三藐院記』によれば「サイキの大嶋」)」、「あをしまこ嶋などと申浦々(愛媛県大洲市青島, 松山市興居島)」と、「と申」をつけて区別して記述している。さらに「と申」の類の表現として、「くしまのうらのちのの湊という浦(宮崎県串間市千野)」、「内之浦という浦[白井(1990)は内海・宮崎市と解釈]」、「よなふ津とやらん人家すくなき浦(大分県米水津)」、「ほとといふ所(大分県保戸島)」という表現を用いている。これらの表現を斟酌すれば、交通の要衝である周防国上関に「と申」を付するとは考え難いことから、「かみの關と申浦里」が周防国上関を示している可能性は低いと考えられる。

### 5.2 疑問点②:周防国の風聞を記す理由

2つ目は、「かみの關」が周防国上関であるとするならば、佐賀関における見聞として、何故、遠方の周防国のことを書き留めたのかという疑問である。『1596年ルイス・フロイスの年報補遺』から、佐賀関で津波被害があったことは確からしい。また『豊府聞書』によれば沖の浜及び府中(図1)では708人もの死者がでていいる。玄與は、佐賀関での見聞として、佐賀関の話ではなく、近隣で大きな被害がでて沖の浜でもなく、何故、周防国のことを記したのであろうか。

玄與が佐賀関出港後、周防国上関に立ち寄り実際に被害を見たのであれば、その事実を事前に知った佐賀関でのくぐりに書き留めたという可能性も考えられるが、現実には立ち寄っていない(図4)。また、佐賀関で伝聞により周防国上関の被災情報入手し、周防国上関を回避し、伊予国北岸沿いルートを航行したという仮説も考えられなくはない。しかし周防国上関に当初から寄港予定だったか否かは、日記を見ても定かではない。当時の知識人の価値基準として捉えた時、著名な港湾都市である上関の重要性に鑑み、あるいは航行上の関心から、豊後國の被害よりも周防国上関の被害を優先し、日記に書き留めたという可能性も考えられる。しかし、『玄與日記』や『三藐院記』には、歌会や道中の寄港地で特産品や酒肴による供応の様相が多く残されており、周防国上関の地理上や海上交通上の重要性を認識していたとはとても思われない。また玄與の上洛の主目的は畿内の文化人(著名な歌人)との交流である。玄與は歌人として「ものの哀れ」を感じる感性はあったが、生活の基盤は薩摩國であり、自らに直接利害関係のない他國である周防国上関の被害状況を、豊後國の状況に優先して日記に書き留めたとは考え難い。周防國の出来事を書き残した理由は見えてこない。

ここで『玄與日記』に立ち返ってみると、「それよりさかの關迄御着被成候。去七月十二日之地震之時。かみの關と申浦里は」と、玄與が「さかの關」と「かみの關」とを区別して記述していることから、両者は別の場所であることがわかる。前後の脈絡や、串間市千野に寄港した際の「くしまのうらのちのの湊という浦」という表現からは、「かみの關」を佐賀関域内の小集落の地名とする解釈もありうる。そこで佐賀関上浦と解釈した場合には、佐賀関が津波被害を受けたにも拘らず、玄與らが寄港可能だったのだろうかとの疑問も生まれる。しかしながら、佐賀関の地形的特徴から(上浦は別府湾に面し、下浦は臼杵湾に面している。図2)、津波被害が大きかったのは別府湾側の佐賀関上浦であり、臼杵湾側の佐賀関下浦はそれほどの被害はなく、玄與らは下浦に寄港したのではないかと考える。そうした場合、下浦と上浦の距離は陸路で「式町式拾八間(約270m)」である(『豊後國古城蹟并海陸路程』)。そして、玄與は佐賀関に陸上泊で5日程度滞

在している。容易に現地(津波被災地)に行くことができる距離であり、時間もあっただと思われる。玄與は、「家・竈もなし」の記述に続いて、『源氏物語』における高潮を怖れて娘たちを山の手の地に避難させたくだりを引用し、「彼須磨の巻に。高鹽におちて。むすめをは岡部の里へやり侍ると見えしも。ことはおもひしられ侍りぬ。」と記している。玄與は高潮を怖れて娘たちを避難させた訳を実感しているのである。伝聞では、ここまでの思いに至ることは難しいのではなかろうか。玄與は、佐賀関上浦の津波被災現場を目の当たりにし、衝撃を受け、被害状況を記すとともに、「ものの哀れ」を感じて『源氏物語』を想起したと筆者らは考える。「かみの關」の記述は、周防国の風聞ではなく、佐賀関での実体験と解釈すべきである。



図5 周防国上関周辺図  
Fig. 5 Map of around "Suou-Kaminoseki"

### 5.3 疑問点③:朝鮮通信使

3 つ目は、朝鮮通信使の記録『日本往還日記』である。文禄五年(1596年)に文禄の役の講和交渉のため李朝通信使正使・黄慎が来朝した。この時に、黄慎が書き残した紀行文が『日本往還日記』である。そこには、「(文禄五年八月九日)この日晴。暁に発航し、夕に上関に至る。関、下関と一様に繁盛し、館舎甚だ宏敞なり。守倭は毛利、これ大将の位の高き者、方に国都に在り。守倭に代り、接待頗る心を尽し、酒饌を呈せらるるに甚だ豊厚、他処に倍す。乃ち毛利的分付せる所と云ふ。」と記されている。豊後地震の約1か月後の文禄五年八月九日(1596年9月30日)夕方に周防国上関に入港し、周防国上関について、下関(長門国)同様大変繁盛していて館舎も広くて立派である、毛利氏の代官が守衛している、使節一行に対する応接が他所に比べて丁寧で心がこもっている

と述べている。そして、これらからは津波被害の様子は窺えない。「家・竈もなし」というような津波被害を受けて、その約1か月後に約300名からなる朝鮮通信使一行を歓待することが可能であろうか。通信使一行は復路でも九月十九日(11月9日)に周防国上関に寄港しているが、同様に津波被害を類推させる記述はない。

朝鮮通信使副使・朴弘長の随員の日記も残されている。佐賀県立名護屋城博物館が所蔵する『観感録:附東槎録』である。これによると、八月九日の記述に「夜泊上関 漁火煌々 月色如畫 下舎公館 此為天使新構云」、翌十日には「晴日晚発船 暮抵熊貴 舟中経夜 波光滄瀾 山月娉娉」とあり、津波被害を感じさせるものはない。公館(館舎)で接待を受けたので、上関には上陸している。復路の記述も、「朝陰暮雨 早発午到上関 雨下如注 舟中経宿」というもので、これも津波被害を感じさせない。

さらに言及するならば、今回の朝鮮通信使は講和と捕虜回還交渉のための派遣であり、黄慎の立場は通常の通信使とは全く異なったものである。日本に継戦能力があるかどうかの国力、戦力の軍事偵察(情報収集)も目的のひとつであったと考えられる。しかも壱岐に到着した閏七月廿五日(9月17日)には、「聞く、日本国畿甸各処の地、大震ありと。」(『日本往還日記』)と、同年の文禄伏見地震の情報を得ているし、八月四日(9月25日)には藍島(福岡県糟屋郡新宮町相島)で地震の揺れを実体験している(『観感録:附東槎録』)。したがって、地震被害調査という観点でも詳細な視察が行われたのではないかと考えられる。事実、両史料には「地震」という言葉が散見される。それにも拘わらず、周防国上関での津波被害の記述はないのである。

また、松岡・他(2012)は、「(津波)被害は、島の南側(上関漁港(沖の浜)とある辺り)だったのではないだろうか。史料4(『日本往還日記』)の記主・黄慎はその被害のあった場所を見ていなかったために、津波被害は記されていないのだろう。」と述べている。しかし、近世の海路・航路(『天保国絵図』(周防国))から推察すると、朝鮮通信使は周防向島(図1)を発して、佐合島と長島の間(雑石瀬戸)を通過し上関へ入港し、上関から上関海峡を通過して外洋へ出たと思われる(図5)。通過直後には、室津側の白浜集落付近を船上から数百mの距離で視認できる。南側集落に津波被害があれば肉眼で確認できる距離であり、見ていなかったとか見えなかったということにはならない。ただし、文禄・慶長年間に白浜や上関漁港の辺りの集落が存在したかは不明である。

### 5.4 疑問点④:国東での津波被害

4 つ目は、国東半島にある興導寺(図1)に残る『興導寺大般若波羅蜜多經奥書』には「文禄五年丙申閏



七月九日大地震仕豊後奥浜悉ク海成人畜二千余死ス」と、奥浜(沖の浜, 図 1)の被害についての記述がある。しかし国東での津波被害については記載されていない。大分県(2004)は、豊後地震では別府湾断層帯が活動したと評価しており、波源が別府湾の比較的奥側に位置したため津波被害が別府湾沿岸に限定されたのではないかと考えられるが、松岡・他(2010)が論じるように、豊後地震津波が広域にわたる津波災害であったのなら、国東にも津波被害が生じたはずであり、『興導寺大般若波羅蜜多経奥書』にも記載があってしかるべきと考える。

### 5.5 疑問点⑤:山口県の津波被害

5 つ目の疑問点は、山口県では豊後地震津波の被害を記録した古文書が存在しない、あるいは知られていないのはなぜかということである。大分県においては、『興導寺大般若波羅蜜多経奥書』、『由原宮年代略記』、『柴山勘兵衛記』、『1596 年ルイス・フロイスの年報補遺』等、多くの同時代史料が存在する。また、「瓜生島という島が沈没した」、「早吸日女神社の社殿が海水に浸かった」、「同神社の神主屋敷の堀に津波痕跡高を示す刻線があった」等、多くの伝承がある。一方、山口県側には豊後地震津波の被害を記録した古文書が存在しない。何故残されていないのか、詳細に検討されて然るべき問題である。史料の消失や散逸という可能性も考えられるが、山口県側には津波被害の伝承すら残されていない(上関町教育委員会や当地の郷土史研究グループに確認した)。また、別府湾を波源とする津波の場合、山口県側で高い津波が予想される地域は地理的に上関周辺と考えられる(図 1)。その上関においては、『日本往還日記』や『観感録:附東槎録』の記述から、被害を生じさせるような津波は襲来していないと考えられる。したがって史料が残されていない理由は、消失や散逸ではなく、津波被害が別府湾沿岸に限定されていたと考えるべきであろう。

以上 5 つの疑問点は、「かみの關」を佐賀関上浦と解釈すれば解決する。津波被害があったのは佐賀関上浦であり、玄與はその佐賀関上浦(上関)の出来事を記事に留めた。また、豊後地震津波において津波高が高かった範囲は別府湾沿岸に限定され、周防国上関に被害はなかったという解釈である。

### § 6. まとめ

『玄與日記』が記す「かみの關」がどこを指すのか、史料を精査した。『三藐院記』には 1594 年に佐賀関に「下関」が存在した可能性を示唆する表記がある。『天正十六年参宮帳』(1590)では、豊後地震発生前の佐賀関に「下関」が存在したことを確認した。一方、『寺澤廣政書状』に記された「上関」は、豊後地震発

生前の佐賀関に「上関」が存在した可能性を示す史料である。また豊後地震の翌年に書かれた『朝鮮日々記』は、佐賀関に「上関」という地名が地震の翌年に存在した可能性を示す史料である。さらに『寛永海部大分大野三郡図』により、豊後地震の 20~30 年後には、「上関村」が公的な地名として用いられていたことも明らかにした。文禄五年(慶長元年)の史料で上関と記述したものは発見できていないが、前後には「上関」、「下関」と書かれた史料が存在することから、豊後地震発生時に佐賀関に「上関」が存在した可能性があるかと筆者らは考える。

そして § 5. で詳述したとおり、『玄與日記』の「かみの關」を周防国上関と考えると、いくつかの疑問が生じるが、佐賀関上浦と解釈すると、これらの疑問は解決する。まず、「かみの關と申浦里」という表現は、海上交通の要衝である周防国上関を指すとは考え難く、佐賀関地域の一集落を指すものと考え、違和感なく受け入れることができる。また、『玄與日記』の記載は伝聞に基づくものではなく、玄與が佐賀関の現地で直接見て、震えるほどの衝撃を受け、日記に残したと解釈すると、『源氏物語』を引用した理由が見えてくる。そして、豊後地震津波において津波高が高かった範囲は別府湾沿岸に限定され、周防国上関に被害を及ぼすような地震ではなかったと解釈することにより、周防国上関の繁栄する模様を書き残し、津波被害を想像させない『日本往還日記』や『観感録:附東槎録』との矛盾がなくなる。さらに、『興導寺大般若波羅蜜多経奥書』に国東での津波被害の記載がないこと、山口県に豊後地震津波の被害を記録した古文書・伝承が存在しないことも、津波被害が別府湾に限定されていたと解釈すれば何ら不自然ではない。

以上から総合的に評価すると、『玄與日記』が記す「かみの關」は、佐賀関上浦を指すと考えるのが合理的である。

なお、筆者らは「かみの關」を佐賀関上浦と判断した根拠のひとつに『日本往還日記』を取り上げた。本文中では特に言及しなかったが、『日本往還日記』の一行と『玄與日記』の一行は、ほぼ同じ時期に瀬戸内海を航行しており興味深い。それがわかるように対比して付表に示す。併せて、豊後地震前後の佐賀関の主な出来事も付表に整理する。

### 謝辞

本稿の作成にあたって、日名子健二氏ならびに匿名の査読者および編集出版委員の行谷佑一氏から極めて有益なご意見を頂き、本論文の改善に非常に役立ちました。ここに記して深く感謝の意を表します。

対象地震:1596 年豊後地震

## 文 献

- 羽鳥徳太郎, 1985, 別府湾沿岸における慶長元年(1596年)豊後地震の津波調査, 地震研究所彙報, **60**, 429-438.
- 平凡社, 1995, 『日本歴史地名大系 45 大分県の地名』, 639-640.
- 平井義人, 2013, 古文書に見る大分の地震・津波, 大分県立先哲史料館研究紀要, **17**, 13-28.
- 鹿毛敏夫, 2006, 『戦国大名の外交と都市・流通—豊後大友氏と東アジア世界—』, 思文閣出版, p.138.
- 前田多美子, 2006, 『三藐院 近衛信尹 残された手紙から』, 思文閣出版, p.108.
- 松岡祐也・今村文彦・都司嘉宣, 2010, [講演要旨] 『玄與日記』に記された文禄五年(1596)豊後地震による周防国上関の津波被害, 歴史地震, **25**, p.131.
- 松岡祐也・今村文彦・都司嘉宣, 2012, 1596年豊後地震における「かみの関」の津波被害, 津波工学研究報告, **29**, 225-232.
- 松崎伸一・川崎真治・荻山和樹・西谷淳・土屋悟, 2012, [講演要旨] 『玄與日記』が記す「かみの関」地点とはどこか(1596年豊後地震), 歴史地震, **27**, p.63.
- 大分県, 2004, 『平成 15 年度地震関係基礎調査交付金 別府一万年山断層帯に関する調査成果報告書(概要版)』(平成 16 年 3 月), p.137.
- 佐賀関町史編集委員会, 1970, 『佐賀関町史』, p.3, p.278.
- 白井忠功, 1990, 黒斎玄與の旅—『玄與日記』—, 立正大学人文科学研究所年報, **27**, 14-20.
- 「瓜生島」調査会, 1977, 『沈んだ島 別府湾・瓜生島の謎』, 167-168.
- 宇佐美龍夫・石井寿・今村隆正・武村雅之・松浦律子, 2013, 『日本被害地震総覧 599-2012』, 東京大学出版会, 56-57.
- 臼杵市教育委員会, 2005, 臼杵市所蔵絵図資料群調査報告書, 口絵 5, p.141.
- 山田宇吉, 1925, 『佐賀關史』, p.6, p.16.
- 吉田茂樹, 1993, 『日本歴史地名事典』, 新人物往来社, p.147.

## 史 料

- 『1596年ルイス・フロイスの年報補遺』: 松田毅一監訳, 1987, 『イエズス会日本報告集第 I 期第 2

- 卷』, 273-326 に収載.
- 『豊後國古城蹟并海陸路程』: 垣本言雄, 1973, 『大分県郷土史料集成 地誌篇』, 51-102 に収載.
- 『雉城雑誌』: 大分県立図書館所蔵, 翻刻: 垣本言雄, 1973, 『大分県郷土史料集成 地誌篇』, 503-928 に収載.
- 『朝鮮日々記』: 法藏館, 2000, 『朝鮮日々記を読む—真宗僧が見た秀吉の朝鮮侵略—』に収載.
- 『玄與日記』: 続群書類従完成会, 1959, 『群書類従第十八輯 日記部・紀行部』, 245-255 に収載.
- 『豊府聞書(写本)』: 国立国会図書館蔵(由学館旧蔵本).
- 『兵庫北関入船納帳』: 林屋辰三郎編, 1981, 中央公論美術出版.
- 『寛永海部大分大野三郡図』: 臼杵市教育委員会所蔵.
- 『観感録: 附東槎録』: 佐賀県立名護屋城博物館所蔵.
- 『興導寺大般若波羅蜜多經奥書』: 宇佐美龍夫, 2005, 『「日本の歴史地震史料」拾遺三』, p.78 に収載.
- 『南航日記殘簡』: 国民精神文化研究所, 1931(1978 復刊), 『藤原惺窩集 卷下』, 377-389 に収載.
- 『日本往還日記』: 谷川健一, 1981, 『日本庶民生活史料集成 第 27 卷 三国交流誌』, 115-133 に収載.
- 『大友義統袖判条々掟書』: 大分県教育委員会, 1983, 『大分県史料』, **35**, 318-319 に収載.
- 『三藐院記』: 続群書類従完成会, 1975, 『史料纂集 三藐院記』.
- 『柴山勘兵衛記』: 「瓜生島」調査会, 1978, 『「津山氏世譜」「柴山勘兵衛記」』.
- 『天保国絵図』(豊後国): 国立公文書館所蔵, デジタルアーカイブ, <http://www.digital.archives.go.jp/gallery/view/detail/detailArchives/0000000247>
- 『天保国絵図』(周防国): 国立公文書館所蔵, デジタルアーカイブ, <http://www.digital.archives.go.jp/gallery/view/detail/detailArchives/0000000239>
- 『天正十六年参宮帳』: 大分県史料刊行会, 1964, 『大分県史料』, **25**, 302-335 に収載.
- 『寺澤廣政書状』: 大分県教育委員会, 1980, 『大分県史料』, **33**(『大友家文書録(三)』), p.309 に収載.
- 『由原宮年代略記』: 文部省震災予防評議会, 1941(1975 復刻), 『増訂大日本地震史料第一卷』, p.598 に収載.

付表 佐賀関、『玄輿日記』及び『日本往還日記』にかかわる主な出来事

和暦	西暦	佐賀関の出来事	『玄輿日記』一行の動き	『日本往還日記』(朝鮮通信使)一行の動き
天正十三年六月九日	1585年7月6日	宣教師パシヨが佐賀関から都に向けて出発(『イエズス会日本年報下』)		
天正十六年一月廿六日	1588年2月22日	大女義統が上洛に当たり関権現社に祈願を依頼		
天正十六年六月廿八日	1588年8月20日	大女義統が袖判条々提書(佐賀関法度)を發給。「關河浦町立」		
天正十六年十月廿六日	1588年12月14日	寺澤廣政書状(材木文書)「上関より尾崎達は百里」		
天正十八年八月十一日	1590年9月9日	「したせきの喜右衛門」らが伊勢神宮参宮(『天正十六年参宮帳』)		
文禄二年 五月一日	1593年5月31日	朝鮮(文禄の役)での失態により大女氏改易		
文禄三年 四月廿四日	1594年6月12日		近衛信尹が「さかの關下へ着」。(『三藐院院記』)	
文禄五年 七月七日	1596年7月31日	藤原惺窩が豊後嵯峨關に泊(『南航日記殘簡』)		
文禄五年 閏七月十二日	1596年9月4日	豊後地震(津波)発生(閏七月九日説もあり)。	近衛信尹・玄輿らは「この浦」(宮崎県日南市南郷町)に滞在。(『玄輿日記』)	対馬府中(長崎県対馬市厳原町)に滞在
文禄五年 閏七月廿五日	1596年9月17日		近衛信尹・玄輿らがさかの關に着(『三藐院院記』)	沓岐にて畿内各処の地震被害を聞く
文禄五年 八月三日	1596年9月24日			藍島(福岡県新宮町相島)にて地震の揺れを体験
文禄五年 八月四日	1596年9月25日			
文禄五年 八月八日	1596年9月29日		近衛信尹・玄輿らがさかの關を發(『三藐院院記』)	
文禄五年 八月九日	1596年9月30日		(『玄輿日記』では七日發)	
文禄五年 八月十日	1596年10月1日		近衛信尹・玄輿ら鞆の浦に着(『玄輿日記』)	周防国上関に着。上陸し泊す。
文禄五年 八月十二日	1596年10月3日			鞆付近の小島にて亥時に地震の揺れを感じる。さらに倭人から閏七月九日の豊後府中における津波被害や同月十二日の伏見地震の被害を聞く。
文禄五年 八月十五日	1596年10月6日			牛窓の本蓮寺に宿し地震の揺れを体験。以降九月九日まで、頻繁に地震を体験。
文禄五年 八月十八日	1596年10月9日		近衛信尹・玄輿ら大坂に着船(『玄輿日記』)	堺着。秀吉に面会出来ず九月九日に堺出立。
文禄五年 九月十九日	1596年11月9日			帰路、再び周防国上関に泊す。
慶長二年 六月廿五日	1597年8月8日	僧慶念が「上せき」より朝鮮に向けて出港(『朝鮮日々記』)		
慶長五年 九月十三日	1600年10月19日	大女義統が石垣原合戦で黒田如水に降伏		
慶長五年 十月	1600年11月	太田・中川氏による佐賀関合戦(関権現社の社殿・宝物一切を焼失)		
慶長六年 六月	1601年	佐賀関が肥後加藤清正領となる		
慶長七年 五月	1602年	加藤清正が関権現社の本社並拝殿等造立(『慶長七年社殿再建棟札銘』)		
元和元年～寛永三年	1615-1626年	『寛永海部大分大野三郡図』成立		
寛永九年	1632年	細川忠利が肥後藩主となり、佐賀関は細川領となる		
正保三年	1646年	『豊後國古城蹟并海陸路程』成立		
宝暦十二年	1762年	細川氏が関権現社社殿を境内榊洞に造営し遷座式を行う(『佐賀關史』)		

関権現社は現在の早吸日女神社のこと

朝鮮通信使の出来事も和暦に換算